司馬遼太郎

竜馬がゆく

全八巻之七

竜馬がゆく 七（愛蔵版）
昭和五十七年 二月二十五日 第一刷
定価 二千三百円
著者 司馬遼太郎
発行者 杉村友一
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 東京 二六五―一二一一
印刷 大日本印刷
製本 大口製本
製函 トーシキ
万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

目

次

厳島 7
男ども 32
窮迫 67
清風亭 104
お慶 155
海援隊 179

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

弥太郎　204
いろは丸　225
中岡慎太郎　283
都大路　321
船中八策　357

装幀　粟屋充
題字　中田功

竜馬がゆく　七

厳　島

幕府は、頭脳を必要とした。この幕府崩壊の危機を食いとめるにはよほどの頭脳が必要であろう。

勝海舟が将軍の直命によってふたたび起用され、江戸から大坂にのぼってきたのは、六月二十二日である。

江戸を発足するとき、幕府の大蔵大臣ともいうべき勘定奉行小栗上野介忠順が江戸城内の一室でひそかに勝を招じ入れ、

「貴殿は大坂に参られる。おそらくかの地にあって幕府中興の方策についてなにかと上様から御諮問あろうかとおもいます。それについてじつはお耳に入れておきたい秘密がござる。お聞きくだされよ」

といった。

小栗忠順は、勝とともに、幕府の二大秀才といわれた人物である。ただし、政見が基本的にち

がっている。勝が、「日本」を考えようとしているのに対して小栗はあくまでも幕府のみを考え、その点、極左と極右ほどのちがいがある。自然、仲もわるく、勝は小栗のことを、

「大邪」

といっているし、小栗も勝のことを、

「薩長土の過激の士とまじわって幕府を内部から崩さんとする奸物」

と見ていた。勝が、竜馬を塾頭として神戸海軍塾をやっているのを小栗はそういう見方で疑い、ついに彼を蹴落して江戸の自邸で蟄居閉門という目にあわせた黒幕は小栗忠順なのである。

さて小栗がささやいた「秘密」というのはおどろくべきものであった。

「長州征伐のために、幕府はフランス皇帝ナポレオン三世より、六百万両の軍資金、七隻の軍艦を借りるつもりである。すでに先方の内諾も得、実現のはこびになっている」

というものであった。

勝はがく然とした。ヨーロッパ列強がアジアを植民地化する場合にやってきた常套手段なのである。衰弱した政府に金と軍隊とを貸して反乱軍を討伐させ、そのかわりに利権を獲得してしまう。小栗はフランスへの見返りとして、横浜に日仏合弁の大製鉄工業をおこすこと、北海道全土を貸与すること、などを用意しているようであった。

さらに小栗はいう。

「長州をつぶしたあと、その仏国の兵力、資力をもって逐次、薩摩、土佐、越前など幕府に反抗的な諸侯を討ち、武力で制圧してしまってから一挙に三百大名を廃し、郡県制度をしき、徳川家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の威権を神祖家康公のむかしにもどすつもりでござる」

勝はなにもいわずに小栗と別れた。勝の胸中、小栗の案が実現したころには日本はほろび、フランスの植民地になり果てているであろうということであった。

（日本どころか、幕府をも亡ぼすやつ）

という憤りが勝にある。

もっともこの小栗の大構想はすでに幕閣の公然たる秘密になっており、その内容は、「亡ぼされる」はずの越前、薩摩、長州、土州あたりの諸侯にことごとく洩れてしまっている。幕末これらの諸侯や志士が幕府を見限るにいたった契機の最大の一つは、この小栗構想にあったといっていい。

小栗構想について、いますこしのべたい。

この、幕府そのものがフランスに事実上身売りしてしまうという案のおこりは、最初、外国奉行池田筑後守が、仏公使レオン・ロッシュと仏国の策士モンブランから説かれて出たもので、小栗忠順がこれに賛同し、熱中し、幕府官僚を説きまわり、ついに老中板倉勝静（かつきよ）と小笠原長行（ながみち）の快諾を得、実現に移しつつあるというものであった。

最初にこの秘密を知ったのはかつて幕府の政事総裁職をつとめたこともある越前藩の松平春嶽（しゅんがく）で、春嶽は土佐の山内容堂などに洩らしている。薩摩藩は、別の経路で知った。

英国人からきいたのである。仏が幕府をにぎって貿易を独占するばあい、もっとも打撃をうけ

るのは英国だった。そのため、仏の対幕接近を妨害しようとした。
英国にとってさいわいにも、横浜の英国公使館には、日本語の会話だけでなく候文まで読解できるアーネスト・サトウという利口な青年通訳官がいた。サトウは各地をとびまわり、多くの人物とあい、ついに日本の情勢と将来について日本人以上の明確な見方をもつにいたった。
第一に、幕府の寿命はながくない。第二に、次の日本は活動的な雄藩の手によってつくられる天皇政権が担当するであろう、という見通しをたてた。
英国はこの見通しのもとに、幕府よりもむしろ薩長に近づく形勢を示しはじめた。自然かれらは薩長側に有利な情報も流しつつあったのである。
その一つが、この「小栗構想」であった。
こうとなった以上、薩長にすれば、
「座して待てば、幕府につぶされる」
という危機感をもたざるをえない。とくに薩摩藩が、藩として倒幕、倒幕方針をとりはじめたのは、この衝撃が最大のものであったといっていい。
さて、江戸から大坂へのぼってきた勝海舟のことである。
すぐ大坂城に登城し、老中の板倉勝静に謁し、小栗構想に真向から反対した。
「封建を廃して郡県を布くという案、幕府はこれを秘密としているようだが、すでに天下周知のことである。西国諸侯のなかではひそかに巴里に使臣を出している者もあり、それらが巴里の新聞その他でこのことを知り、本国に通報してきている。西国大名はひそかにこの暴案を恨み、急

速にイギリスに接近して幕府に対抗するに諸侯同盟を結ぼうとする勢いさえある。とにかく三百諸侯をつぶして天下を徳川氏のみが独占しようというのはすでに政治ではなく私欲であり、かつその私欲のために日本を餌として餓虎のごとき欧州列強に投げあたえるというのはどういうことか」

と論じ立てた。

が、幕閣は勝の論を容れなかった。

この時代における最大の奇観は、勝海舟という男であろう。巨大な孤峰に似ている。幕臣の身ながらこの乱世にあって左右いずれにも偏せず、一種の予言者的存在として時勢のなかで屹立していた。

身は軍艦奉行という幕府の高級官僚ながら官僚的游泳をいっさいしない。

徒党を組んで権力を動かすこともきらいだから政治的勢力というものもない。かれがつれて歩いているのは、つねに若党の新谷道太郎ひとりでしかなかった。

妙な人物である。

たった一枚の舌で天下に対抗している不世出の評論家とも言えるし、この乱世の彼岸が見とおせる日本唯一の予言者といってもいい。

「勝が大坂にきた」

という報がつたわると、京の薩摩藩邸から大久保一蔵が馬を飛ばして意見をききにくるし、佐

幕急先鋒の会津藩の有志も門をたたいて会いにきた。
ただ幕府の最高首脳部だけが、勝を怖れつつもその警抜すぎる議論にへきえきし、高くは評価していない。
「また勝の法螺か」
と、将軍輔佐役の慶喜ほどの才人でさえまゆをひそめることが多かった。
幕府でただひとり、勝という人物の器量と徳川家への誠心をあるがままに評価している者がいた。
将軍家茂である。
安政五年、十三歳で将軍職を嗣ぎ、こんにちまで足掛け九年、徳川幕府はじまって以来の動乱のなかでこの若者は生きてきた。
家茂は、生来の怜悧さのうえに、ほとんど人間離れしたほどの無私な心をもってうまれついていた。早くから結核に冒され、自分の寿命のながくないことを悟っていたらしく、そういう透きとおった心境から、自分の閣僚の人物や時勢を見つづけていたようである。
その家茂が、事があるとふたことめには、
「安房、安房」
といって勝の意見を求めたがった。
江戸で免官閉門の罰をうけて蟄居していた勝をにわかに起用したのはこの家茂の異例の直命によるもので、このことについては閣僚はなんの相談もうけず、たとえ受けても彼等は婉曲に反対

したであろう。

勝は大坂へきた。

早速登城して家茂に拝謁すべきであったがその側近からひそかに洩らされたところによると、この四月来、御重体であるという。

勝は大坂の宿舎にあって家茂の回復を待ちつづけたが、ついに七月二十日の朝、勝と懇意の将軍侍医松本良順からひそかな報らせがあり、

「御大切になった」

という。死んだというのである。勝は目さきの暗くなるほどの衝撃をうけ、夜陰を冒して登城すると、殿中は咳の音もなく、人は息をひそめ、森林のなかをゆくように静かであった。勝は多感な男だ。

（徳川氏今日、亡ぶ）

と「断腸の記」に書いたほどに、この家茂の死を重大に思い、それほどに傷んだ。

次の将軍は慶喜である。というのが自然なりゆきだが、多少混乱した。

慶喜は弁才ともに備わった活動家で、それだけに幕閣にも不人気であり、江戸の大奥や旗本のあいだにも人気がなく、京の勤王派の公卿にも人気がなかった。

俊敏な慶喜は自分の不人気を知っている。この不人気を押して将軍になったところでうまくやれないことを察し、

「自分には時勢の混乱をおさめうる自信も見通しもない」
といって固辞し、頑として受けなかったため、逆に一種の人気が出来、慶喜反対派でさえ慶喜の将軍就任を説得しようとした。
やむなく慶喜は受け、
「ただし徳川宗家だけは継ぐ。将軍の職をつぐことはいましばらく考えてみたい」
と言い、とりあえずこの水戸家の出の稀代の才物は「将軍御名代」というかたちで幕府を代表するようになった。
その就任早々、鼓を鳴らすようにして打ち出した政策が、
「長州大討込」
というものであった。慶喜はそれを大声呼号して触れまわった。なにしろ家康以来の権略家という評判があり、かつ、家康にもなかった能弁、教養、海外知識がある。一人で政策をたて、一人で宣伝し、一人で実施しようという勢いであった。
「大討込」
という誇大な表現にも慶喜らしさがあり、かつそういう景気のいい表現をつかわねば、連戦連敗で内外の信用をおとしてしまっている幕府の現状を救いようがなかった。
慶喜はいそぎ作戦方式を変えた。
いままでは幕軍が従で諸藩の兵が主になって戦っていたが、それを逆にし、幕軍を主力にすることにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.